# おかまの"お見合いババア"に、縁結びの極意を聞く

おかまの店はたくさんあるが、店で出会った男女の7組もが結婚まで至っているところとなると珍しい。一体、どんな"ママ"がいるのか?

今週のカミングアウト

**たまこ**

新宿・厚生年金会館の隣にある居酒屋「ぎりぎり玉子」のママ。45歳。中学卒業後、芸能界に憧れて上京。3枚のレコードを出すが喉のポリープで歌を断念し水商売を始める。17歳で2度の自殺未遂。名前も知らない人に助けられる。やがて山城新悟と出会って映画や舞台で役者として活躍。7年前に8時間半の手術を受ける大病をわずらうが、その後あるお客さんにお店をプレゼントされて現在に至る。ずっとぎりぎりの人生(本人談)をおくってきたママの店で出会い、結婚に至ったカップルは7組もいるという。

中学卒業後、芸能界に憧れて上京したたまこさんは、とんとん拍子に3枚のレコードを出したが喉のポリープで歌を断念。やがて六本木で水商売を始めた。

**パトリック**「たまこさんて僕のお母さんと同じぐらいの年じゃないですか」

**たまこ**「ほっといてよ(笑い)」

**パ**「昔からゲイだったんでしょ?」

**た**「**まだ石ぶつけられてる頃よ。**めいっぱい差別されて」

**パ**「昔のゲイバーってどんな感じだったの?」

**た**「漢字の芸と同じよね。歌も踊りもお花もマスターして、ママの夜食を作ってお布団を敷いて、背中を流して帰る……。ほんとに**修行の身**って感じよ。服装は着流しか日本髪で、『何処のお母さん派』とか流派があって」

恋愛のもつれから17歳で2度の自殺未遂をし、7年前には死線をさまよう大手術を受けたママは「今の私の人生は付録みたいなものだから」と言う。

**た**「自殺の時も病気の時も見知らぬ『足長おじさん』に助けてもらって。このお店も、たった3回しか会ったことのない人に『何か人のためになることをしなさい』ってプレゼントしていただいたの」

**パ**「そうやってゼロに戻った時に、自分は何か変わった?」

**た**「不幸の原因は世間じゃなくて自分にあるんだって思うようになったの。自分が変わらないと世間は変わらないんだから、まず自分が変わろうって。不幸から逃げてる人って最悪だもの。私はいつももう一人の自分と戦ってるから、絶対に逃げないの」

**そうしたママの経験や出会いが、今のお店の雰囲気につながっている。**

**た**「カウンターの中にいると客席が世間のように見えちゃうの。パーティなんかがあると、その中で偉そうにふんぞり返ってる人とか、美人なのにツンとしてる女のコとかもいるし。『こんな店に来た時ぐらい肩の荷下ろしなさいよ』って言うんだけど。どうしても嫌なお客さんには帰ってもらうわ」

**パ**「今の若いコをどう思いますか?」

**た**「自分を見失ってるコが多いわね。エゴの固まりっていうか……。すごい美人なんだけどモラルが全然ないコもいるし。そういうコでも、一皮剥いたらすごいいいコだったりするのよね。そのうち悩みを打ち明けられたりしてね。**ママからお母さんって呼ばれるようになったり**」

## 毎日が"出会いのパーティ"その中から偶然カップルが…

お客さんの中からは、今までに7組ものカップルが誕生している。

**パ**「**お見合いババア**じゃないですか」

**た**「そうよ(笑い)。**うちはあくまで出会いのお店なの。**バブルが弾けた頃にはここで紹介されて助かった人もいるし、就職に困ってる女のコには企業の人を紹介したり……。その中でたまたまカップルが7組できたって話で」

**パ**「人と人とのコミュニケーションの橋渡しじゃない」

**た**「そう。駆け込み寺なんて言われることもあるしね」

**パ**「僕もお見合いババアになりたいんだけど、なんでできちゃうの」

**た**「私には足長おじさんに『人を助けなさい』って言われた**使命感**があるから。それと、ぎりぎりの人生やってるうちに人の苦しみや気持ちを感じられるようになって、だんだん『この人とこの人が』っていうのがインスピレーションで感じられるようになってきたの」

**パ**「自分の恋人はいるの?」

**た**「恋愛なんてもうまっぴらよ。それで自殺までしたんだから。今は**つまみ食いだけ**」

**パ**「お客さんの中から?」

**た**「当然よ。2丁目に行って冷凍マグロみたいな買ったりしないわよ」

**パ**「ハハハ……。築地に行ったほうがいいもんね」

**た**「都合のいい時だけ女になるの。**昼間男で夕方おかま、夜は女で朝方オバケ。**この4段階で生きてるから(笑い)」

「人と人との結びつき」を最も大切にしているというたまこさん。店のポリシーは「客を差別しない」こと。たとえ偉い人でも肩書やプライドを背負ったままの"ナチュラルに戻ってない人"には「お帰りいただく」とか

# 「人の役に立ちたい」という使命感が"人間を見る目"を養う

## パトちゃん日記

**5月17日**

今年は嵐のようなゴールデンウイークだったな。京都、大阪、札幌、横浜、東京とDJ活動に忙しかった。最終日の土曜日GOLDでは、みんな、もう「おどり念仏」状態。そうなっちゃうと、僕もプレーキがきかなくなる。「これでもか!」ってくらいどんどんテンションを上げて上げまくって、最後にハジケルまでいっちゃう。最後の曲が終わった時は僕もみんなも完璧ハジケテて頭ぐるんぐるん。もう最高だったよ!

「おどり念仏」になってくれたみんな、ありがとう//

パトリックDJ情報●6/3(土)THE STEERING IN UK(みんなイギリスまで来てね♥)

パトにメッセージを! あて先●〒162-80 (株)扶桑社 週刊SPA!編集部「パトリック係」まで

撮影/高橋清人

シューさんの新作「フレッシュ　キル」は6月3日より渋谷ユーロスペース1にてレイトロードショー。レズビアン向けのビデオ「Fingers & Kisses」も6月21日に発売される

# 「この映画を撮っている間にレズビアンに目覚めた！」

**シューさんは台湾人として初めてホイットニー美術館でビデオ・インスタレーション（洗濯機の中のテレビと電話線を通じて対話できる装置）を展示した経験を持つ。昨年、ニューヨークのゴミ捨て場（スタッテン島）をテーマにした映画『フレッシュ　キル』を製作した彼女は、レズビアンの映像作家としても話題になった。**

**パトリック**「というわけで、今日はゴミっていうことから夢の島公園に来たんだけど、印象はどう？」

**シュー**「本物のゴミが見えないんでがっかりしたけど、ここを夢の島と名付けたのは面白いよね」

**パ**「あなたの映画は一つの流れがあるドラマというより断片的な映像がコラージュされた、一見理解しづらい〝アート・フィルム〟に近いものだと思ったんだけど」

**シ**「最初は、映画を作れば美術館での展示よりも多くの人に伝わると思ったんです。でも終わってみると、確かにあなたがアート・フィルムと呼ぶものになっていて、コンピュータ・ハッカー、セクシャリティ、環境問題、人種問題などがコラージュされている。それは、**NYというコスモポリタンな都市を描写したかったから**なのかな。NYでは全ての物事がごちゃ混ぜで、人種の境界なんか破壊されちゃってるから」

**映画の中にはあらゆる人種の組み合わせが登場する。**

**シ**「NYにいると、嫌でも人種問題への意識が高まるからね。そこで論理的、合理的になろうとする人は狂ってしまうかも。私はわざと人種を混合させて、観客が混乱するようにしたんです」

**パ**「僕が日本語を話すと驚かれることがあるけど、シューは東京にいたら日本語で話しかけられるでしょ？　それってどう感じる？」

**シ**「最初に『**わかんない**』って言葉を覚えちゃったから。**あれって便利よ**（笑い）。自分がすぐに素直になれば誤解は少なくて済むから。ただ、私は日本の女性の基準ではいい加減すぎるみたいよ」

## カムアウトするのに50万ドルもかけた!?

**パ**「ところでさあ、ここって有名なゲイの発展場なんだよ」

**シ**「えっ、ほんと？（笑い）」

**パ**「あなたがレズビアンの監督だって聞いて、最初はレズビアン映画なんだろうって思ってたんだ。でも見たらそうじゃなかった」

**シ**「これを最初に上映した時、『**なんでレズビアンのセックス・シーンがもっとないんだ**』なんて言われた（笑い）。私はもっと広い問題に焦点を当てたかったから」

**パ**「そういうのを作る気はないの？」

**シ**「『フレッシュ　キル』の後に、レズビアン向けのビデオをもう2本も作ったよ」

**パ**「いつからレズビアンになったの？」

**シ**「最近のことだよ。カムアウトに**50万ドル**もかけたんだ！」

**パ**「……何それ。お金なんてかけなくてもできるじゃん」

**シ**「この映画でそうなったの。一緒に仕事をしてたカメラウーマンと恋に落ちて、セックスビデオを撮ったんだ」

**パ**「**映画を作ることそのものがカミングアウトとなっちゃったんだ**（笑い）」

**シ**「その製作費が50万ドル（笑い）」

**パ**「僕も映画を作りたいと思ったことがあるんだけど、みんなどうやって監督になるんだろう？」

**シ**「いろいろあるよ。プロダクションのアシスタントから成り上がる人もいるし、映画学校に行く人もいるし……。クレジットカードで借金していい映画を作った人もいる。情熱さえあれば誰でもなれるってことね」

**パ**「シューはどうしたの？」

**シ**「私は3年間貯金したの。それから、テレビ局やロックフェラー財団から援助してもらったよ」

**パ**「僕のこと役者で使うっていうのはどう？　メロドラマティックなやつで」

**シ**「……はいはい。考えとくね（笑い）」

## パトちゃん日記

**5月25日**

けっけっけっ！　これには大笑いさせられました。日本って変な銅像が多い国だと気になってたんだけど、これはヒットだな。全裸の女がゴルフスイング。しかも笑みを浮かべて。サラリーマンが利用するビジネスホテルの玄関に彼らの一番好きな「ハダカ」と「ゴルフ」をM-Xして飾るとは、さすがサービス大国日本、行き届いてるね。パチパチパチ。

安易に組み合わせた不自然さが最高

パトリックDJ情報●6/10(土)MINISTRY OF SOUND IN LONDON(イギリスで待ってるから来てね♥)

パトにメッセージを！　あて先●〒162-80　(株)扶桑社　週刊SPA!編集部「パトリック係」まで

パトリックの
# カミングアウト大作戦

今週のカミングアウト

## NY在住のレズビアンの映像作家が語る新作の狙い

短い髪を赤く染めた、小柄だが存在感のある女性。台湾で生まれ、NYで映像作家として活躍する新鋭の人に、パトが必殺の質問攻め！

**シュー・リー・チェン**

今年40歳になる台湾生まれ、アメリカ国籍の映像作家。台湾に4人兄弟の末っ子として生まれ、ニューヨーク大学に留学のため渡米。今年で18年目の滞在になる。1986年にアメリカ国籍を取得、1990年、台湾人として初めてホイットニー美術館でビデオ・インスタレーションを展示して注目を集める。昨年、ゴミと核廃棄物をテーマにしたコラージュ的な映画『フレッシュ　キル』を製作。その過程で、自分がレズビアンであることをカミングアウトし、以後何本かのレズビアン・フィルムも製作している。

撮影／高橋清人

# "ストレート"には決して味わえない神輿の快楽!!

祭りシーズン到来の日本。毎日がお祭りのようなパトだが、由緒正しいお祭りには参加したことがないという。そこで浅草へと向かった!

今週のカミングアウト

**浅草・三社祭**

江戸に夏を告げる台東区浅草の三社祭(浅草神社例大祭)。今年は5月19〜21日に行われ、祭りばやしの流れる中、名物の大行列が仲見世などを練り歩いた。しかし今年は浅草神社の修理工事に合わせ、本社神輿が修復の真っ最中で、ハイライトの「宮出し」「宮入り」はなかった。浅草神社の社殿は、昨年1月から総工費3億5000万円をかけて修理中で、完成は来春とのこと。それに代わって氏子44か町の町神輿連合渡御がクライマックスとなった。パトリックがお邪魔したのは祭り2日目、5月20日の夕方5時過ぎだった。

**三社祭で賑わう浅草雷門の前で、パトリックはすでに興奮していた。背中にはっぴ、足に草履、頭に鉢巻とドレッドヘア。パトリック**「日本で大きな祭りに行くのは今日が初めてなの!」

そのわりに「形」だけは完璧に成りきっている。すぐに神輿を見つけて追いかけたが、通りを蹴散らす怒濤のそばでひきつった笑顔を見せるのがやっとだった。

**パ**「やっぱり、お神輿を担いでる中には入りづらいよ。みんな町内会ごとのチームでやってて、**自分は本来は邪魔者だし、入ったらエネルギーを乱しちゃうから**」

理解の仕方は当たってるが**らしくないぞ!**……雑踏に揉まれて疲れ果て、境内でお好み焼きとビールを頬張っていると、ジャージ姿の地元のおっさんが話しかけてきた。

**おっさん**「兄ちゃん。6時に浅草ビューホテル前にでっかい神輿が出るからな。せっかく外国から来たんだから担いでけよ」

思わぬタレ込みにいきり立つパトリック。ビューホテルの前に行くと、大きな3台の神輿が人込みの中でうねっていた。

**パ**「凄いけど……ちょっと怖くない?」

確かに、さっきと比べていかつい男どもが目立つような気もする。いいから、早く行けよ!……担ぎ手の若者が手招きをして誰かがパトリックの背中を押すと、休憩で神輿が着地するまで、パトリックは行ったきり戻ってこなかった。

**パ**「**もう、すっごい。ぶっ飛んじゃったよー**。足も肩も痛いし、すぐ疲れて駄目だって思うんだけど、そこを越えると違うレベルに飛んじゃうの。始まったらもうやめられないって感じ。足なんか踏まれても感じないし、みんなと一体化してるから考える暇がなくなっちゃう。あと、責任感もすごいの。ちゃんと地面に下ろすまで誰も力抜かないんだよね」

神輿など祭りのトランス状態はクラブのダンシング・ハイとよく似ている。

**パ**「そうそう。みんな盛り上がるためにやってるだけだから。自分の体がリズム以外のものを全部シャットアウトして、それだけになっちゃう。それにさあ、踊ってる人がいて、外側にそれを見てる人がいるっていうのもクラブと同じだよね。昔から僕ってお祭り大好き人間で、僕は『お祭りDJだ』って言われてるから」

## 日本のお祭りもセックスの臭いがすごいんだね!!

パトリックが子供の頃に住んでいたスペイン南部には、日本の神輿とよく似たお祭りがあった。

**パ**「みんなで大きな人形を担いで練り歩くんだ。怪我する人もいるけど、もうわけわかんない状態だから。リオのカーニバルだって、ワシントンのゲイ・パレードだって、場所やリズムは違うけど、みんなが一体化して飛んじゃうっていう心のノリは同じだと思うよ」

三社祭の担ぎ手には、今風の若者も多かった。髪をキリッとひっつめた女のコの姿も目立つ。

**パ**「お神輿担ぐ前にお酒飲んで、みんな仲良くなっちゃうんだって。**日本人って普段は隠れてるけどベースはニーハーだと思うからさ**、楽しめればいいっていう。だから来たら思わず入って、飛んじゃうんだよ。男女の区別もなくなっちゃうし、肌と肌が親密になって……。ほんとにさあ、激しいセックスやった後みたいな感じだよ」

日本の昔のお祭りでは、実際に夜這いが許されていたりする風習があった。

**パ**「それすっごいわかるよ。体がくっついてみんなと波に乗って熱くなる。それだけでセックスの臭いがすごいもん。この後ジャンジャン飲んで、そのままやっちゃえって感じになるのわかるよ……。**ほんと言うとさあ、さっき担ぎ始めた時に一回立っちゃいそうになったもん!**」

戻ってこなかったのは、そういうことだったわけか!

**パ**「違う違う。飛んじゃったら関係なくなったけど、初めのうちに前にも後ろにも可愛い男のコがいてさあ、胸とかお尻とか、身体じゅう触ったりしちゃうんだもん……。僕ばっかり責めないでよ。ああー、ほんとにすっごいセックスやったみたい。これから仕事になんて行きたくないよー。最後までやりたいー」

パトリックははっぴを着たまま、興奮した顔で次の仕事へと向かって行った。

撮影/高橋清人



一見、祭りの興奮にのみ込まれているかに見えるパトだが、何を隠そうこの外人は性的にも興奮しているのだった。そして前後の男のコたちにはそんなことを知るよしもない……

## パトちゃん日記

**6月1日**

げつ気持ち悪くて最高/「コンドーム・グミ」。7周年記念だかなんだかでSPA!が作って僕に送ってきた。本当のコンドームは舐めるとまずいんだけど、これはいけるね。なんでこういうもの作ったのかよくわかんないけど、きっと、これを見てSPA!→コンドーム→HIV→あっパトちゃんって具合でカミングアウト大作戦に辿り着くために作られたと考える。すばらしい。でも美味しく舐めれてもこれではHIVを阻止できません。残念。

本物のコンドームの味、知ってる?

パトリックDJ情報●6/14(水)Queen in PARIS(ボンジュール!パリまで来てね!)

**前にも後ろにも可愛い男のコがいてさぁ、立っちゃったよ!!**

常人の理解を軽々と超えるパトにメッセージを! あて先●162-80(株)扶桑社 週刊SPA!編集部「パトリック係」まで

今週のカミングアウト

# 日本でたったひとり!〝ゲイの芸者〟の波瀾万丈

**伝統と格式を重んじる花柳界にゲイでありながら入り込んだ人がいる。ダジャレのようだが実は大まじめで、笑いに満ちた人生にパトが迫る**

**真紗緒(まさお)**

60歳。茨城県生まれ。昭和28年に上京、画材店に勤務するものの、映画館で男性からナンパされたことをきっかけに、新宿でゲイバーのボーイとなる。幼少時から女っぽく、〝兵隊さんごっこ〟では常に〝看護婦役〟。学校でも「オレ」「ボク」と言えず、兵隊帰りの先生に「男らしくしろ!」としばしばひっぱたかれたという。昭和34年、錦糸町にバー「まさ子の店」を開店。現在もママとして店を切り盛りしているが、一方で10年ほど前から向島の見番に所属。向島界隈で毎晩お座敷に出ている。毎日5時間睡眠というタフな生活を続ける。

**取材は真紗緒さんが所属する向島の見番で行われた。見番とは、芸者さんを育成、管理し、料亭への派遣を行う組合である。現在、ここに登録されている芸者さんはおよそ300人。「お呼び」を掛ける料亭は向島界隈に32軒あるという。**

**パトリック** 日本でただひとりの〝ゲイの芸者〟なんて、すごいじゃない!

**真紗緒** あのね、正確に言うと、あたしは芸者じゃないの。幇間なの。

**パ** えっ、なにそれ?

**真** 芸者衆とお客さんとの間を取り持って、座敷を盛り上げる役なのよ。

**パ** ピエロみたいなもん?

**真** そう、太鼓持ちよね。本来、幇間は男性が男性の恰好をしてやる仕事。芸者は女性が女性の恰好をしてやる仕事。あたしは男だからまず芸者にはなれないんで、幇間として登録してもらったの。

**パ** でも真紗緒さんは女の人の恰好してるから幇間とも違うんじゃないの?

**真** 三味線弾いたり、踊ったり、**やってる仕事は芸者さんと同じよね。**

**パ** だったら、やっぱり〝ゲイの芸者〟でいいじゃない。でもこの世界って、まず入るだけでも難しいんじゃないの?

**真** いいえ、若くてそこそこきれいな女のコだったら、すぐにお座敷に出られるわよ。最初はお客さんのお酒作ったり運んだりして、徐々に芸を覚えていくわけ。

**パ** でも真紗緒さんはゲイだから……。

**真** あたしの場合は、ホント、ラッキーだったのよね。ゲイボーイやってた頃、先輩から「何か稽古事しなきゃ生き残れないよ」って言われて三味線は始めてたし、自分の店を出した頃には、踊りと長唄の先生にもついたし。

**パ** 芸者の世界に入る前からいろいろマスターしてたわけね。

**真** で、この見番「向嶋墨堤組合」の組合長の息子さんが偶然、あたしと同じ流派の踊りを習ってたわけ。そんな縁でおかみさんから「いま幇間さんがいないから、幇間でどう?」って言われてね。

**パ** 真紗緒さんも「あたし、芸者になりたい!」ってプッシュしたんでしょ。

**真** 昔から花柳界の雰囲気には憧れてたからね。あたし、周りから「日本調だ」って言われてたし、お座敷に座れたらいいなって思ってた。でも男だからダメかなって。だから、なれたときはうれしかったわよ。**もう、素敵な恋人ができたみたいで毎日が楽しくて楽しくて。**

**パ** 真紗緒さんがいままでやってきたこと、コミュニケーションの仕方、コネクションの作り方とかがよかったんだよね。

**真** あたしの後にも「芸者になりたい」って何人かゲイの人が来たみたいだけど、だめだったみたいだからね。

## 芸事は家に泥棒が入っても盗まれない自分の財産

**パ** いま、芸者になろうとしている女のコは増えてるの、減ってるの?

**真** 増えてるわよ。就職難もあるしね。でも、「お稽古がつらい」とか泣き言を言うコも多いわね。あたしは言うの、芸事は家に泥棒が入っても盗まれないものなんだから続けなさいって。そういう財産を身につけるのが嫌だったら辞めればって。

**パ** ところでお客さんは真紗緒さんがゲイだってこと知ってるの?

撮影／高橋清人



# 一度だけ本当の女と勘違いされ、惚れられたことがある!

真紗緒さんの三味線に体が自然と反応してしまうパト。「2人で芸者チームを作ろう!」と盛り上がっていた

**真** 料亭で芸者遊びするお客さんって常連さんばかりだからみんな知ってるわよ。でも、この世界に入ってすぐの頃、1回だけひどい目にあったのよ。

**パ** どうしたの?

**真** **隣に座ったお客さんがあたしの袖を握ったきり、離れないの。**

**パ** 惚れられちゃったんだ!

**真** 声出すと男だってわかっちゃうからずっと黙ってて。タバコもふかせなくてね、あたし、鼻から煙出しちゃうんで(笑い)。で、「お前、飲み物はビールかい?」て聞くからコクリとうなずいて。でもビールはビールで飲むときに**喉仏がゴクンと動いちゃうし**ゲップも出るから手をつけられなくてね。2時間くらいずっと黙って座ってた(笑い)。

**パ** ギャハハハ!でも真紗緒さんは声出さなきゃ、ホンモノの芸者さんに見えるよ。勘違いされるっていうのはいいことじゃないの。ねえ、もしボクらが芸者遊びするとしたら1人いくらかかるの?

**真** **㊙万円**くらいかな、3時間で。

**パ** えーっ、高い!この不景気でお客さん減ってるんじゃない。

**真** うーん、どうかな。あたしのお座敷には影響ないけどね。それに銀座のクラブよりは安いわよ。たとえばお客さんが4人だと芸者は6人付くでしょ。それに食事が付いてフリードリンクだからね。ブランデーだろうが焼酎だろうが、何をいくら飲んでも同じ勘定。あたしを指名してくれればうまくやってあげるわよ!

**パ** ねえ、SPA!の経費で来よッ!

## パトちゃん日記

**6月7日**

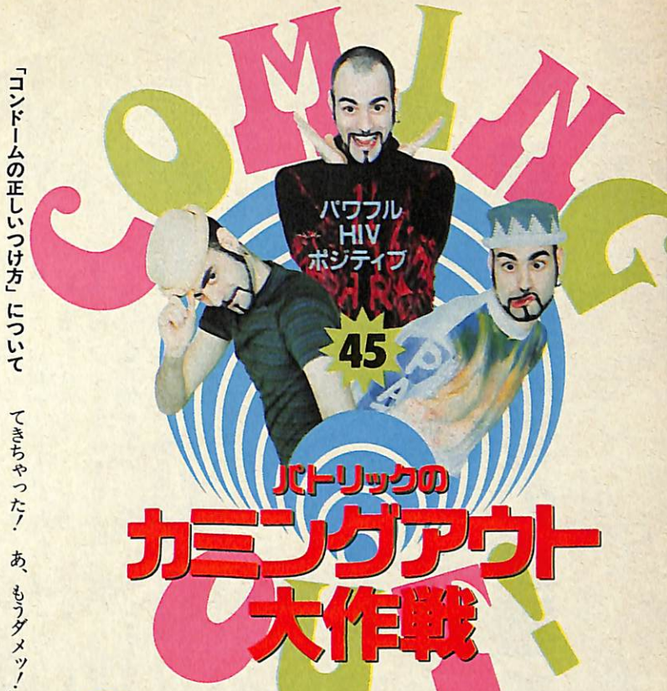
来日前と来日後の日本に対する印象の変化を、日本に住む外国人600人に調査した新聞記事があった。その中の「日本人はなぜ外国人に心を開かないのか?」って質問の答えの62%が「日本人は外国人の考え方を理解できないから」!違うね、これは。本当は「外国人のほうがまず日本人を理解しようとしていないから、心を開いてもらえない」のだ。この62%の外人はガラスのバリアを自分の周りに張り巡らせて人と接しているのだよ。まあ、日本人にもこういう人っているけどね。

Foreigners' opinions about Japan worsen as they live here, poll finds

サリン事件前のアンケートなので「平和と安全の国」の答えが90%!今はどうかな?

パトリックＤＪ情報●6／21(水)FAB! at AUTOMATIX

パトにメッセージを! あて先●〒162-80 (株)扶桑社 週刊SPA!編集部「パトリック係」まで




# 目指せコンドーム博士！工場見学で知った新事実

**コンドームをつけさせたら日本で5本の指に入ると言われているパトだが、作り方までは知らなかった。こりゃいかん、と工場まで出掛けた**

**「コンドームの正しいつけ方」については、中学校や青年会議所など、さまざまな場所で何度も講演してきたパトリックだが、その製造方法についてはちょっと自信がなかった。そこで希望したのがコンドーム工場の見学だ。ここを見学して、いろいろ教えてもらえば……〝コンドーム博士〟になれる！ そんなカワイイ夢を抱きつつ、パトは東北自動車道を栃木へとひた走った。**

**ところがどっこい、工場ではいきなり試練が待ち受けていた。**

**パトリック**「わっ、すっごいニオイ、クッサ〜イ！ あっ、目も痛〜い、涙も出てきちゃった！ あ、もうダメッ！」

写真のパトの表情を見れば、その匂いがいかに強烈か、ちょっとは伝わるかもしれない。ここは「糊部」といって、コンドームがまさに製造されている部屋。ベルトに装着されたガラス管が原料液の入ったタンクをくぐる。すると管にゴムの皮膜がへばり付く、という仕組みだ。が、原料のゴムの中に安定剤として混ぜられているアンモニアが気化して、そりゃもう、とんでもない刺激臭が充満しているのである。もちろん、普段、人は立ち入らない場所だ。撮影はほんの数分だったが、カメラマンの高橋氏にとっても

「いままでで肉体的に一番ツライ撮影」（本人談）となった……。

**パ**「でも、オチンチン型のガラス管がぐるぐる回っていて、面白いじゃん。あ〜、こんなにいっぱいオチンチンがあったらすごいよね、〝**ファッキング・マシン**〟って感じじゃない？」

撮影が終わると、パトは〝パトらしさ〟を取り戻したようだ。

**パ**「ねえ、よ〜く見ると、ゴムの色とか、ガラス管の型もちょっとずつ違うよね。ほら、**これなんか亀頭の部分が大きくない？**」あと、オチンチンの根元の部分の模様もいろいろあるよ」

パトがそう言うと、「パトリックさん、目がいいですね」と案内してくれている品質保証部の宮田修平部長が思わず感心する。やはりパトは下ネタに関しては異常に敏感なのである。

**パ**「形とか模様とかはコンドームが出来上がった後で加工するもんだと思ってた。これは新しい発見！」

宮田さんによると、不二ラテックスのコンドームには30型、7色あるのだそう。色の売れ筋はグリーンとピンク。そして黒。「黒だと逞しく見えるからじゃないですか」と宮田さんが言う。

**パ**「そうね、日本人のは小さいからね」

大きなお世話だ、ほっとけ！

## 新製品のテストは社員が奥さんや恋人とやる!!

続いて品質検査のプロセスを見せてもらった。寸法や重量、そして穴がないかどうかの検査などを全製品について行っている。宮田さん曰く「さまざまな検査を経てから市場に出ているので、正しい使い方をしていれば破れることは0%に近いくらいない」とのこと。

**パ**「でもさ、ぼくがHIVをもらったのは相手のコンドームが破れたからなんだよね。アメリカのメーカーのだけど。でも、絶対に正しいつけ方してたんだ」

激しすぎたんじゃないの？

**パ**「それはない、相手のオチンチンが大きすぎたっていうのはあるかもしれない（笑い）。でもコンドームは大きいモノにも対応できるように作ってるわけだからね。そう、コンドームのサイズは何を基準にしてるんですか？」

**宮田**「かつて**社内でコンテストをやったんですよ**、2000人くらい応募がありましてね」

**パ**「デカチンコンテスト、それって最高！ ニューヨークのナイトクラブでもやってるよ、でもそれは違う意味でだけど（笑い）」

**宮**「で、いろいろな型を石膏で取りましてね、そこから標準的なサイズとか亀頭の形はどうなのかと議論しまして、現在の型に至っている、と」

ちなみに不二ラテックスのコンドームは、長さは先端の精液溜まりを含み18㎝、亀頭部分の周囲38㎜が普通サイズとなっている。

**パ**「新製品とか出す時はどうやってテストするの？」

**宮**「そういうのも社内でモニターを取るんですよ、奥さんや恋人と試してみるわけです」

**パ**「へえ、すごい、何でも社内でやっちゃうんだ。でもモニターは大切だよね、人によってセックスのやり方は違うし、**それに……入れる場所も違ったりするわけだからさ！（笑い）**」

**不二ラテックス**

昭和24年設立。コンドームを中心とした衛生用品や手術用ゴム手袋などの医療用品、看護用商品などを製造している。コンドームのシェアは業界第2位。ひと月に4億3200万個製造し、その4割を輸出している。3年前、世界初のブランドコンドーム「コシノミチコ」を発売、大きな話題となる。これを機にコンドームが、コンビニで気軽に買えるカジュアルな商品となり始める。今回、パトリックが訪問したのは栃木市にある栃木工場。案内して下さったのは業務企画部長の森田さん（左）と品質保証部長の宮田さん（右）だ。

今週のカミングアウト

撮影／高橋清人　取材協力／不二ラテックス



パトは息を止めて必死にポーズを作った……。「僕ブランドのコンドーム作ったら売れますよ、〝パトちゃんコンドーム〟、かわいいでしょ！」。どうも破れそうなイメージが……

**よーく見ると、亀頭の部分の形もそれぞれ違うんだね！**

## パトちゃん日記

**6月14日**

僕は子供の頃からテディベアが大好きで、現在20人程のテディ君たちと一緒に住んでいる。その中の№1テディ君を紹介します。彼はいつでもハイパーな（テンションの高すぎる）僕を優しく見守ってくれていて、どんなに遅く帰ってもちゃんとベッドで僕を待っているのだ。最高の恋人。すてきな彼なんだけど、残念ながらおちんぽが付いていない。誰かおちんぽ付きの〝ダッチベア〟を作ってくれないかな……。

すでに僕の香りが染み付いたテディ君

パトリックDJ情報●7/5(水)FAB./ at AUTOMATIX

アクティブなパトにメッセージを！　あて先●〒162-80　(株)扶桑社　週刊SPA!編集部「パトリック係」まで

# 外人が最も理解に苦しむ"浪花珍風俗"を味わう

日本の"奇妙さ"をカミングアウトさせてきたパトが今回携んだのは大阪名物のアイデア風俗『ノーパン牛丼』。さて、パトの感想は?

今週のカミングアウト

**ノーパン牛丼「ちち乃屋」**

17年前に大阪・阿倍野にできた日本初のノーパン喫茶「あべのスキャンダル」は、8年前から夜11時以降ノーパン牛丼の店として営業している。数年前、大阪の郊外に場所を移した。現在のビルは、1階から6階まで全てTバックハンバーガー、ランジェリーしゃぶしゃぶ、などの店が入っている。「ちち乃屋」の料金は1万2000円。牛丼は食べ放題で、ドリンクは2杯目以降1杯1000円。女性に触ることもできないし、彼女たちが隣に座ることもない。見えるのは乳だけ、の不思議な店は、平日の夜でも満員なほど混み合っている。

**かねてから日本の風俗産業に疑問を感じているパトリック。日本の風俗がこれほど細分化されて発達している理由のひとつは、ややこしい風営法があるからである。今回はその風俗の中でも一番わけがわからん! と彼が言うノーパン牛丼の店、大阪「ちち乃屋」に行ってみることにした。**

まずは店長に話を聞く。

**店長**「うちは昼間はショータイムのあるノーパン喫茶『あべのスキャンダル』で、夜11時から『ちち乃屋』になるんですよ」

**パトリック**「ノーパンで牛丼食うとおいしくなるの(笑い)」

**店**「それはわかりませんけど……。まあ、3杯食べるのが限度でしょうね」

**パ**「料金は?」

**店**「1万2000円です。牛丼食べ放題で、アルコールは2杯目から1000円。ソフトドリンクは飲み放題。時間は無制限です」

**パ**「**で、ただ牛丼食べるだけなんですか?**」

**店**「そうです」

**パ**「女のコに触るのは?」

**店**「駄目です」

**パ**「隣に座っておしゃべりしたりは?」

**店**「それもないです。スカートの中も見えません」

**パ**「あくまで想像だけ?」

**店**「だから、うちは風俗店じゃなくて、あくまでも牛丼を食べる〝飲食店〟でやってられるんです(笑い)」

これこそ、日本の風営法の不思議さを一番よく表している。

**パ**「結構高いよね」

**店**「そうですよね。でも、お酒は飲めないけど裸は見たい、という方も多いんですよ。そういうところって他にないでしょ」

## 風営法のぎりぎりを守り続けて17年!

30人ほど在籍している女のコたちの月給は、1日6時間勤務、週休2日で月給100万円近くになるという。彼女たちの側から見れば、他の風俗よりもだいぶ楽な仕事だ。

**パ**「**お客さんは欲求不満になんないの**」

**店**「そこなんですよ。もやもやを残して帰られる。それがまた来ようかなあという感じにさせるんですね。**3割ぐらいの方は常連さんですよ**」

**パ**「なるほどねえ……。でも、**なんでそれで牛丼なの?**」

**店**「深い意味はないんですけど。まあ、**吉野家のギャグ**っていうか……」

この辺の感覚が大阪ならではだ。考えてみれば、日本の新しい風俗はほとんどが大阪発である。

**パ**「やっぱり東京とかだとギャグにできなくて恥ずかしくなっちゃうんだろうなあ……。ところで、風営法なんかないほうが中途半端じゃなくていいとは思いませんか?」

**店**「確かに中途半端なのはそうなんですが、でもなくなればなくなったで他の店も何でもありになるから、差別化しにくくなるんですよ」

**パ**「あるほうがアイデア勝負ができるわけだ」

**店**「うちは**風営法のぎりぎりを守り続けての17年ですから**(笑い)」

店長の話を聞いたあと、客席のほうに移動した。店長が「お客さんは一日平均して30人ぐらい」という割には、平日にもかかわらずほぼ満員だった。

**パ**「日本の風営法ってやっぱりよくわかんないけど、ここに来る『見たいだけ』のお客さんの気持ちは何となくわかるなあ……。でも僕だったら1万2000円は払わないよな。日本の風営法って毛深すぎるぞ」

乳首をおかずに牛丼を食すパト。なぜ? を連発していたが、もしここに好みのカワイイ男のコがいたら気分は他のお客さんと同じかも……

## パトちゃん日記

**6月16日**

貰ったり、貰ったりしたバッジを布に張り付けてコレクションをしている。やっぱりAIDS関係のバッジが多いけど、中には中学生の子がくれた名札とか、ハットピンとかいろいろ張り付いてる。ピンが付いてれば何でもOKなの。これでジャケットとスカートを作ろうと思ってる。いいでしょ。バッジって結構、引き出しの奥とかに埋まってるから、見つけた人は僕に送ってね。僕のコレクションに入れてあげます。

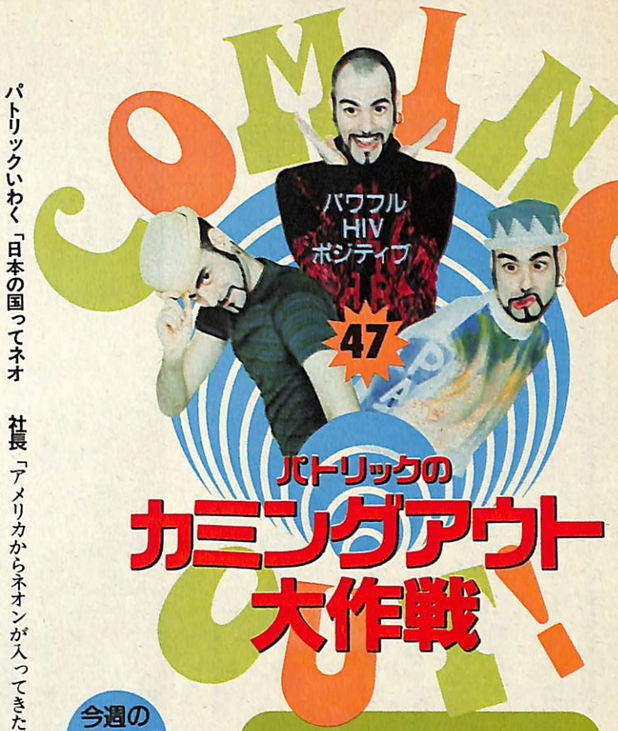
一番のお気に入りはひまわりの形をしたバッジ!

パトリックDJ情報●7/15(土)MILK BAR in群馬

**え! ただ食べるだけなの? で、なんで牛丼なの?**

夏に向けて気合十分のパトにメッセージを! あて先●〒162-80 ㈱扶桑社 週刊SPA!編集部「パトリック係」まで

撮影/高橋清人 取材協力/ちち乃屋




# "日本らしさ"の象徴!? ネオンサインを作る人々

映画『ブレードランナー』を観て以来、ネオンサインを"日本っぽさ"の重要な構成要素と考えているパト。どこで誰が作っているのかを探った

**今週のカミングアウト**

**グリコのネオンを作った人々**

大阪・道頓堀は日本一のネオンのメッカ。その中でもいちばん有名なのが、「一粒300メートル」のグリコの看板だ。現在のグリコ看板は1983年、大阪の朝日電装株式会社によって作られたもので、同社は昭和25年に操業以来、日本じゅうの大都市で大型ネオンサインを手掛けている。高度成長期に急成長し、街のシンボルや目印としても親しまれてきたネオンサインだが、最近は都市の景観問題などで肩身がせまくなりつつある。それでも、グリコがそびえる道頓堀は、ネオンサインの無法地帯である。

**パトリックいわく「日本の国ってネオン文化だと思うんだよねえ。線香花火みたいにパッパッパッって感じじゃん」。なんだかよくわからんが、確かにこれほどネオン看板が溢れている国は他にない。ネオンといえば大阪、大阪といえば心斎橋のグリコ看板だ!……というわけで、日本のネオン文化(?)について考えるべく、大阪のネオン工場をたずねることになった。**

**心斎橋のグリコ看板を作った朝日電装さんは、創業昭和25年。以来全国のネオン看板を手掛けている。社長の塚脇氏に話を聞いた。**

**パトリック**「日本ではいつごろからネオン看板ができ始めたんですか?」

**社長**「アメリカからネオンが入ってきたのは大正時代ですが、高度成長期に増えだして、東京オリンピック、大阪万博などを契機に一気に広がったんです」

**パ**「どうして日本ではこんなに増えたんだと思いますか?」

**社**「ネオンサインは平和と成長のシンボルなんですよ。だからこそ、**経済が発展する時にはネオンも増えていく。**逆にオイルショックの時なんかはネオンが規制されましたからね」

**パ**「そんなに電気使うんですか」

**社**「使わないんだけど、どうしてもそう見えてしまうんですよ」

**パ**「アメリカだと最近はネオン看板は減ってきてるなあ」

**社**「日本でも規制が厳しくなってます。景観の問題とかで……。経済が成熟するとそういう問題が出てくるんでしょうね。道頓堀は未だに無法地帯ですけど(笑い)。逆にアジア諸国は今まさにネオンが増えつつある。うちも去年、中国に進出したんですよ」

**パ**「なるほどね。だんだんわかってきた」

**社**「光があるところに人は集まるというか……」

**パ**「街のシンボルみたいなところもあるし」

**社**「ネオン目当てに『ああ、ここまで来たんだ』とかね」

**パ**「ところで、いくらぐらいするんですか?」

**社**「大きいものでは1億2億……10億なんてのもありますよ」

**パ**「そんなにするの」

**社**「それに場所代もあるから」

## ただの看板からメディアへ進化し続けるネオンサイン

**社長と一緒に会社の中を見学した。パソコンの画面に銀座のネオンサインの画面が映っている。**

**社**「銀座のネオンの絵柄や文字や天気予報なんかをここから通信回線で送ってるんですよ」

**ネオンサインはただの看板からメディアに変わりつつある。**

**社**「大画面の街頭テレビや店の外装、テレビ局のセットなんかもウチが作ってるんですよ」

**工場では職人さんがネオン管を1本ずつ曲げて、ガスを入れていく。**

撮影/高橋清人　取材協力/朝日電装株式会社

「僕のパーティのネオンサインも作ってもらいたいんだけど値段が高そう……。誰かプレゼントしてよー!」と勝手なことをのたまうパトだった

**パ**「僕もこういうのやりたいんですけど……」

**社**「いいですけど、まあ、とりあえず3年間は床掃除から始めてもらいましょうか(笑い)」

**パ**「えー、そんなに……。やっぱり職人の世界は厳しいなぁ。将来はどんな仕事を手掛けたいですか?」

**社**「それはやっぱり、富士山にネオンサイン立てたいなあ(笑い)。反対が多くて無理だろうけど」

**パ**「でもハリウッドなんか、あれがないと駄目って感じになってるじゃないですか。もしかしたら富士山だって夢じゃないかもよ!」

**社**「そうね……まあ、ウチのグリコの看板は大阪ミナミのシンボルになりましたからね」

## パトちゃん日記

**6月20日**

芝浦のごく普通の煙草屋で「GAY」なる煙草を見つけた。なんて煙草にGAYなのかわからんけど、派手なデザインでいいね。会社で自分がGAYだとカミングアウトできず悩んでる人は、この煙草をさりげなく吸ってみたらいいかもね。ストレス解消になるかも。GAYのことで悩んでる友人にプレゼントするのもいい。この煙草の売上金の一部はエイズ予防団体に寄付されるんだって。

パトリックDJ情報●7/23(日)PRECIOUS HALL in 札幌

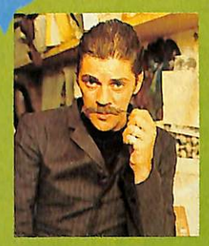
**えっ! ひとつ10億円するものまであるの!?**

ちょっと力ぜ気味のパトにメッセージを! あて先●〒162-80 (株)扶桑社 週刊SPA!編集部「パトリック係」まで

今週のカミングアウト

# "スーパースタイリスト"という不思議な職業

英国に行くための情報収集に奔走していたパトは、思わぬ有名人と出会うチャンスを得た。一言では説明できない仕事ぶりの中身を聞いた



**ジュディ・ブレーム**

1960年、イギリス生まれ。'80年頃から廃物利用のアクセサリー・デザイナーとして注目を浴び、その後ボーイ・ジョージのスタイリングや創刊当初のイギリスの雑誌『FACE』等でスタイリストとして活躍し、世界に名を馳せる。現在はクリストファー・メネスをはじめとする多くのファッション・デザイナーのコレクションでコンセプト作りに参加したり、ネナ・チェリー等のミュージシャンのビデオ製作でアート・ディレクションを担当したり、自ら"メッセージTシャツ"をデザインしたりと活動範囲は多岐にわたる。

**なんとロンドンのクラブからパトリックにDJの依頼が来た。しかも3週間連続の長期仕事だ。ロンドンに行くのは久久とあって、パトは大乗り気。でもそんなに長く日本を離れちゃって、この連載はどうするつもりだ!**

**パトリック**「大丈夫だよ、ロンドンで面白い人といっぱい会って、取材してくるからさ、まかしといて!」

**で、あてはあるわけ?**

**パ**「うーん……、全然ない……」

**激怒する担当者を無視し、パトは東京在住のデザイナーであり、生粋のロンドンっ子でもある友人のクリストファー・メネス氏に電話で相談した。**

**メネス**「だったら今ロンドンからジュディが来てるから、会って聞いてみれば?」

**パ**「えっ! あの有名なスタイリストのジュディ・ブレームに会えるの? だったら彼もSPA!で取材しちゃおうよ」

**なんて運のイイ奴……。**

**フットワークの良さと安易さとの間に境界線がないパトは、さっさと段取って表参道の「クリストファー・メネス」のアトリエにジュディさんを訪問した。**

**雑誌などで何度も名前を目にしていた"憧れの人"があっさりと取材に応じてくれたことに感動したパトは、ワクワクしながらアトリエに足を踏み入れた。が、その瞬間に言葉を失ってしまった。"ジュディ"という名前からして当然女性だろうと想定していたのだが、目の前に登場したのはダリのような髭を蓄えた男性だった。おまけに……、ゲイだった♥**

**パ**「えー、なんでジュディって名前なんですか? 本名じゃないでしょう?」

**ジュディ**「もちろん、違いますよ。昔、友達がニックネームとして付けてくれて、それが定着しちゃったんです(笑い)」

**彼はビールを片手に何か作業をしていたようだが、それを中断してパトにもビールを勧めた。ふと覗いたアトリエのゴミ箱は、ビールの空き缶で満杯。さすがイギリス人だ。**

**パ**「ボーイ・ジョージが一番有名だった頃の、あの恰好は全部ジュディさんが考えてたんですか?」

**ジ**「まさか! 彼はちゃんと自分のスタイルというものを持っていたからね。僕はそれをサポートしていただけだよ」

**パ**「やっぱりね、それが日本のアーティストと違うところだよね。僕はいろんなアーティストと直接会ったり、テレビで観たりする度に不思議に思うんですよ、彼らってどうしてこんなに似合わない恰好して人前に出れるのかって。きっとスタイリストの言いなりになっているからでしょうね」

**ジ**「僕はキャラクターに合わない服をポップスターに着せることは彼らの**ファンを裏切る行為**だと考えているので、いくらお金を積まれてもやりません。だからよく仕事を断りますよ、僕は(笑い)」

**おだやかで繊細なしゃべり方だが、その奥に頑固な一面がかいま見えた。**

## 住所録にはエイズで失った友人がそのまま残っている

**パ**「ジュディさんは世界中のスーパーモデルやアーティストと仕事をしてますけど、ここだけの話で、すごく変な人とか気難しい人っていますか?」

**ジ**「いませんよ、だってそういう人とは仕事しないよう努力をしてるから(笑い)。この間『FACE』でナオミ・キャンベルと仕事したけど、別に問題なかったよ。彼女はわがままで有名らしいけど。僕が仕事した人たちって2通りに分けられるんです。ひとつは常に僕を必要としてくれて、ずっといい友達になってしまうタイプ。ボーイ・ジョージみたいにね。もうひとつは、**僕のスタイリングのセンスをすっかり自分のものにしてしまって、僕を必要としなくなるタイプ**」

**パ**「えっ! 必要とされなくなったら、仕事が来なくて困るでしょ?」

**ジ**「全然困らない。というか、それは僕にとってはすごく**うれしいこと**なんです。だって、僕から学んだセンスがその人の中に住み着いちゃうわけでしょう」

**自分の利益を無視したところに、自らの仕事の喜びを見いだす度量の大きさがいわゆる"スタイリスト"という枠にとどまらない幅広い活動につながっているのだろう。その考え方はパトと相通じるらしく、パトはいたく感動していた。**

**パ**「今までで一番印象に残っている仕事ってなんですか?」

**ジ**「『RED HOT+BLUE』という世界中のクリエイターが力を合わせているエイズ・チャリティのプロジェクトがあるんだけど、それのミュージック・ビデオの仕事だね。すごく勉強になったし、楽しかった。僕はそのプロジェクトのロンドンの"チア・リーダー"だったから」

**パ**「へえ、エイズの活動もやってたんですか。それはなぜ?」

**ジ**「僕はすごくたくさんの友達をエイズで失っているから」

**そういってボロボロの3冊の住所録を取り出して見せてくれた。**

**ジ**「この中にはもうこの世に存在しない友人が何人もいるんだけど、僕は彼らの名前や住所を線で引いて消すことができないまま持ち歩いているんだ……」

**この話をし始めた途端、彼の目は真っ赤に充血し始めてしまった。**

**ジ**「もうこの話はやめにしよう、たぶん泣き出してしまうから」

**パ**「うん、そうですね。きっと僕まで泣いちゃうだろうから」

**その後、パトはジュディさんからロンドンの最新情報を提供してもらっていた。次週からのロンドン特集を乞うご期待!**

撮影／高橋清人

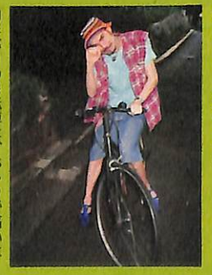
最近の仕事では『FACE』の創刊15周年記念号でスーパーモデルたちの顔にパトと同じ位置にピアスを着けさせて話題を呼んだ。そのためパトの顔をひと目見てジュディさんは大笑いした

# 「仕事相手がいずれ自分を必要としなくなるのがうれしい」

## パトちゃん日記

**7月1日**

ひどーい! 誰! 僕の大事なバイクをアパートの前から誘拐したのは! まだ、ローンも残ってるのに。おかげで今はこのガリガリ自転車でバイク捜しをしているのだ。だけど今年30歳の僕には、やはり自転車坂道上りはかなりきつい。お願い! 僕のバイクを早く返してちょうだい。バイクの名前は、品川は6276(HONDA フリーウェイ シルバー)。発見したら連絡してね。



10年ぶりの自転車は、おしりが痛いよ

パトリックDJ情報●7/29(土)MILK BAR in 群馬

パトにメッセージを! あて先●〒162-80 (株)扶桑社 週刊SPA!編集部「パトリック係」まで

今週のカミングアウト

# 外国に移り住む者同士が語る差別意識と使命感

**前号の予告通りロンドンに到着したパト。まずはゆっくり観光でも、と思いきや「嘘、観光って大嫌いなの」と慌ただしく取材に向かった**

**カズコ・ホーキ**

幼い頃からイギリスの本や音楽に魅かれる。1978年、26歳の時に日本で英語教師をしていたイギリス人と知り合い渡英し、3か月で帰ってくるつもりがそのまま住みついて、結婚にまで至る。彼が即興音楽家だった関係から、音楽劇団に参加するようになる。1982年、日本人の友人とフランク・チキンズというパフォーマンス・バンドを結成し、「We are ninJa」が世界的にヒット。現在も音楽、パフォーマンス活動を続けており、一昨年、英国芸術庁から助成金を得て英国国内を巡業。昨年はエッセイ集『ロンドンの床下』を上梓した。

**ロンドン取材の第1回は、その昔「We are ninJa」を大ヒットさせたフランク・チキンズのカズコ・ホーキさんだ。今年でイギリス在住17年目になる彼女を、彼女とは反対に日本に住む外国人のパトリックが訪ねた。**

**パトリック**「今のカズコさんはイギリスにたくましく根を下ろしているけど、最初に来たときはどうだったんですか？」

**カズコ**「私なんか、〝アジア人〟と〝女性〟というマイノリティな部分が2つも重なってたじゃないですか。そうすると、イギリスの中産階級の、ある程度教育を受けた男性にはダブルパンチっていうか、**みんな妙に気を使って協力してくれるんですよ**(笑い)。フランク・チキンズが成功したのにもそういうところがあって」

**パ**「女性がマイノリティ？　イギリスはすごくレディ・ファーストの国でしょ？」

**カ**「確かにイギリスの女性はすごく甘やかされてると思いますよ。だからサッチャーみたいなしょうもない女の人が出てくるんじゃないですか。あまりにも甘やかされ過ぎたみたいな人が」

**パ**「カズコさんってフェミニストなんですか？」

**カ**「イギリスで、女の人が仕事してて『フェミニストじゃない』って言うのはかなり難しいし、勇気がいりますよ。現実に女性はマイノリティの扱いを受けて、差別されてますから」

**パ**「何か具体的な行動はしてるの？」

**カ**「いや、ただ『私フェミニストです』って言うだけかな(笑い)」

**パ**「僕はゲイだしHIVだけど差別っていう言葉を全然信用してないんだよね」

**カ**「信用してないってどういうこと？」

**パ**「**マイノリティの人が持ってるコンプレックスが差別を生んじゃってるんだと思うの。**例えば『HIVだから差別されるんじゃないか』と考えてるから差別を感じてる面もあると思うんだ。僕はHIVでも差別されると思ってないから」

**カ**「それはすごくよくわかるけど、その考え方で差別されてる人を切り捨てるっていうのも間違ってると思う。現実に差別されてる人ってきっといると思うのね。**差別がある限りは、私はあると言ったほうがいいと思う。**そうすればだんだんと社会が変わっていくんじゃないかな、という希望はありますね」

## 日本人ってどうしても「自分を優れてる」と思いたい

**彼女は先日、母親のお葬式のために久しぶりに日本へ帰った。**

**パ**「僕は死ぬまで日本に住みたいと思ってるんだけど、カズコさんは日本に戻るつもりはないんですか？」

**カ**「父親がいるから帰りたいと思う時はあるけど、それは一年に多くても何か月かのことで、住むつもりはありませんね。**今はもう、『イギリスに帰る』っていう感じになっちゃってるから**」

**パ**「戻っては行けるけど、住めない……僕のNYと同じだね。久しぶりに『戻って』みた日本の印象はどうでした？　日本にも外国人が多いけど……」

**カ**「母親の看病をしてくれていた人が日系のブラジル人だったんですよ。外見は日本人で、日本に憧れを持って来たんだけど、言葉が上手く喋れない。それがわかっちゃうと、もう道を教えてももらえなくなるって。そういう話を聞くと、日本人ってやっぱり『井の中の蛙』っていうか、どうしても自分を優れていると思いたいんだなあと」

**パ**「日本は『出る杭は打たれる』の社会だなあっていつも思うんですよ」

**カ**「日本でもイギリスでも、外国人にはそれはあるのよ。私の友達が作った諺に『**出る杭は打たれる、でも抜けない**』ってのがあって」

**パ**「それいいね。『でも抜けない』(笑い)」

**カ**「いいでしょ。私一生忘れないと思う。打たれたら床ごと壊れたりして(笑い)。どうせなら壊れてから抜かれたいよね。今住んでる国に対する思い入れがあるから。パトリックや私みたいな外国人がいるのはいいことだと思うのよ。きっと何かの使命があるんだと思う。お互いにね」

**パ**「そんな気がする。**僕なんか日本でしなくちゃならないことが山ほどあるもの。**日本もどんどん変わってるしさあ。社会の常識をちょっと違うなと思って自分なりの道を模索したり、ただのサラリーマンにならなかったり、そういう人がすごく増えてきてると思う」

**カ**「ある意味では、そういう時代だからオウム真理教のような事件が起きたんだと思うし。**今までの社会とは別の価値観を求めてるんでしょうね。まあ、あれはちょっと方向が違っちゃったんだけど**」

**パ**「そうね。でも、その価値観が変わってきてる部分は感じていたいよね」

**カ**「そう。もっと感じたい」

**パ**「僕なんかDJっていう〝夜の世界〟の仕事してるから、ほんとにそういうヘンなコが周りに多いんですよ」

**カ**「どの辺にいつも出没してるの？　新宿二丁目とか六本木？」

**パ**「全然。**僕そういうガイジンだけとか、ゲイだけとかっていうの大嫌いだから。いろんなものがミックスされた状態が好きなんだ。**でも本当はねぇ、日本にいる外人はみんな帰ってほしいと思ってるの(笑い)。僕は自分を外人と思ってないからね」

**カ**「え、そうなの。それってすごい**レイシスト**(人種差別主義者)だね(笑い)」

撮影／高橋清人

「なんで政府からお金をもらえたの？」「企画書を提出して審査に受かった。でも私たち日本人アーチストがもらえちゃうってところが、やっぱり日本と違うなぁと思いますね」

# 移住するなら『出る杭は打たれる、でも抜けない』の根性で！

## 緊急手配!!

7月9日(日)の早朝6時半〜8時に、青山デニーズの駐車場に停めてあった僕の車のトランクから仕事道具の400枚ものレコードをケースごと(3箱)盗まれたのだ。今、僕はHIVポジティブと宣告された時と同じショックを受けている。〝怪我したりしなかったから良いと思えば〟って友達は言ってくれるけど怪我のほうがいいよ。怪我は治るけど20年前から収集した貴重なレコードは大金はたいても、もう買えないんだぜ。頭ん中、真っ白状態。

このレコードケースや、放棄された大量のレコード等の情報協力求む！

パトリックDJ情報●8／2(水)FAB! at AUTOMATIX

**レコードを盗まれ大ショックのパトに励ましのお手紙を！　あて先●〒162-80 (株)扶桑社　週刊SPA！編集部「パトリック係」まで**

# パトリックのカミングアウト大作戦

## 入れ墨に身を覆う〝全身芸術家〟

**パトのロンドン取材第2回は、不思議な〝芸術家〟のお宅を訪問した。この人は仕事のみならず自分の肉体も、生き方も全てが芸術していた**

今週のカミングアウト

**デイブ・ベイビー**

1955年、ロンドン生まれの彫刻家・イラストレーター。子供時代をトレーラー・ハウスで過ごし、イギリス中を旅する。10代後半でアーティストを目指してロンドンに戻る。これまでの仕事は、ロックバンドのミュージック・ビデオ用のアニメーション制作、ボーイ・ジョージなどのアーティストから発注を受けての木彫り家具制作、デレク・ジャーマンの初期の8ミリ映画への出演・宣伝活動など多岐にわたる。彼の体は全身をタトゥーに覆われている。そして日本人女性との間に生まれた7歳になる子供がいる。

ほんとだったらロンドンであのボーイ・ジョージに会える予定だったのに、スケジュールの都合で直前でおじゃんになった。トホホ……。パトリックは気を取り直して、東京で会ったボーイ・ジョージの元スタイリストのジュディ・ブレーム（本誌7／26号に登場）の紹介で、アーティストのデイブ・ベイビーの家に向かった。彼はボーイ・ジョージに木彫りの家具を作ってあげた彫刻家でもある。

彼の家があるロンドンの南の地区は、まるでパトが昔住んでいたニューヨークでいえばハーレムのような所だった。古いウルヘアハウス（国が貧しい人に提供している家）の彼の部屋には、彼の作品やアート関係の道具がそこら中に転がっていた。トイレの便座が壁に飾られ、その横にはアラビア語で書かれたタンポン挿入の説明書が貼ってあった。その不思議な部屋でパトを待っていたのは、全身に入れ墨をした男だった。

**パトリック**「わお、すごいね！ ほんとに全身に入ってるの？」

**デイブ**「ああ。自分で彫ったのもある」

**パ**「どこが一番大変だった？」

**デ**「お尻に彫った尻尾（しっぽ）のやつだな。傷口はちゃんと治らないし、彫るそばから色は落ちるしで醜い思いをしたよ。その彫り師は本物のサディストだったんだ」

**パ**「で、尻尾が出来上がってどんな気分だった？」

**デ**「ステキだったさ。まるで宙を歩いてるみたいに。**僕は自分に尻尾があったらいいなと思ってたし、それを考えるだけで至福だったんだから。**生まれる前に尻尾のある〝猿〟だったからかな」

**パ**「僕の友達に尻尾付きで生まれた子がいるんだけど、赤ちゃんの時に切られちゃったって言ってたな」

**デ**「そんな、**もったいない！** 残しておけばよかったのに」

……**常人にはとてもついていけない会話が続く。**

### 40歳にして初めて対面する兄弟が現れた！

**彼はさらに服を脱いで〝棺桶〟をデザインした入れ墨を見せてくれた。**

**デ**「僕の入る棺桶をイメージしたんだ。で、中から飛び出してるのは僕自身さ」

**絵柄は全てを自分でデザインしている。**

**デ**「僕が死んだら皮を剥いで入れ墨を保存してほしいよ」

**彼の作品には性器をモチーフにしたものも多い。**

**パ**「何か理由はあるの？」

**デ**「僕は古い宗教的な様式が好きなんだ。世界中の宗教的なアートにはよく性器がモチーフに使われてるだろ？ それが僕の作品に大きな影響を与えてるんだよ」

**彼とのインタビュー中、居間の大きな椅子には7歳になる息子が座っていた。**

**パ**「ねえねえ、もしさあ、自分の息子が大きくなってデイブみたいにタトゥーを入れはじめたらどうする？」

**デ**「別に。うちでは祖母も祖父もタトゥーを入れてるよ。オヤジに彫ってやったのは僕だもん」

**パ**「そういえばデイブのお父さんってどんな人なの？」

**デ**「〝極端な人〟だね。**オヤジは何人かの女性との間に、9人もの子供をつくったんだ。そのことで**彼は不思議な体験をしているよ。カーラジオで母親を捜している男が番組に電話をかけていたらしいんだけど、その男がどうも昔に自分が種を植え付けて育ててない息子のような気がして番組に電話して確認したんだ。そしたらやっぱりそうだった！ つまり僕は**40歳にして兄弟と初対面ってわけさ（笑い）。来週この家に遊びに来るよ**」

**パ**「……エキセントリックな家庭だね」

**デ**「僕はその初対面の異母兄弟も入れた9人の名前を自分の体に彫ってるんだ」

**話をしながらパトはどんどん彼の存在感に引きずり込まれていく。彼の場合、存在や生き方そのものがアートなのだ。**

**パ**「これからの夢は何かある？」

**デ**「そうだなぁ……体の残ってる部分を全部タトゥーで埋めたら、ストリップ小屋の呼び込みをやって、小屋でサックスを吹きたいな。ストリップの呼び込みって、仕事そのものがアートだと思うよ。ずっと前からやりたいと思ってるんだ」

**世界にはいろいろな人がいるものだ。**

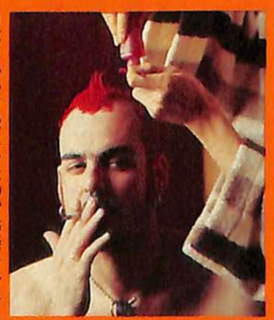
# 「僕はずっと自分に尻尾（しっぽ）があればいいなって思ってたんだ」

デイブ氏はその昔「ボーイ・ジョージに惚れられて困った」という。彼自身はストレートだが、ゲイにすごくモテるらしい。「ボーイ・ジョージと寝たの？」「一度だけね（笑い）」

## パトちゃん日記

**7月10日**

母親が英国人だから、幼少の頃はよくロンドンに来たけど大人になってからは、初めて来た。その頃の印象では、ロンドン＝パンクだったのに今は全然パンクのパの字もない。残念だからパトちゃんが再現することに。髪の毛をちゃんとブリーチしてからファイヤーレッドにした。その名の通り炎の赤色になったけど、カメラマン氏は「ロナルド・マクドナルドみたい！」って、ホテルの床に張りついて笑っていた。ひどい。



日本に帰って緑にしたのでお楽しみに

パトリックDJ情報●8／23(水)FAB！ at AUTOMATIX

暑さにめっぽう弱いパトにメッセージを！ あて先●〒162-80 (株)扶桑社 週刊SPA！編集部「パトリック係」まで

撮影／高橋清人